中　野　遺　跡

富田林市遺跡調査会報告３
編集・発行　富田林市遺跡調査会
住　　所　〒584
富田林市常盤町１番１号
発行年月日　1997年１月31日

調　査　地　大阪府富田林市若松町西二丁目
1696-1
調査原因　銀行建設に伴う緊急発掘調査
調査主体　富田林市遺跡調査会
調査担当者　中辻　亘
調査面積　80㎡
調査期間　1996年10月１日～1997年１月31日

はじめに（図１）

中野遺跡は、富田林市内の中央を流れる石川西岸の中位段丘上に位置している。遺跡の立地している部分は、石川と羽曳野丘陵に挟まれた平坦面の中で最も広い部分に位置している。遺跡は東西約1000m、南北約900mの範囲に広がり、遺跡の中央を国道旧170号線が南北に走っている。

過去の発掘調査では、国道以東の遺跡東半部で旧石器時代から中世の遺物を伴う遺構が確認されており、中でも弥生時代の遺構が顕著である。また、サヌカイト製の打製石器や未製品、多量のサヌカイト剥片が出土することから、石器製作に関連した集落の存在が想定される。

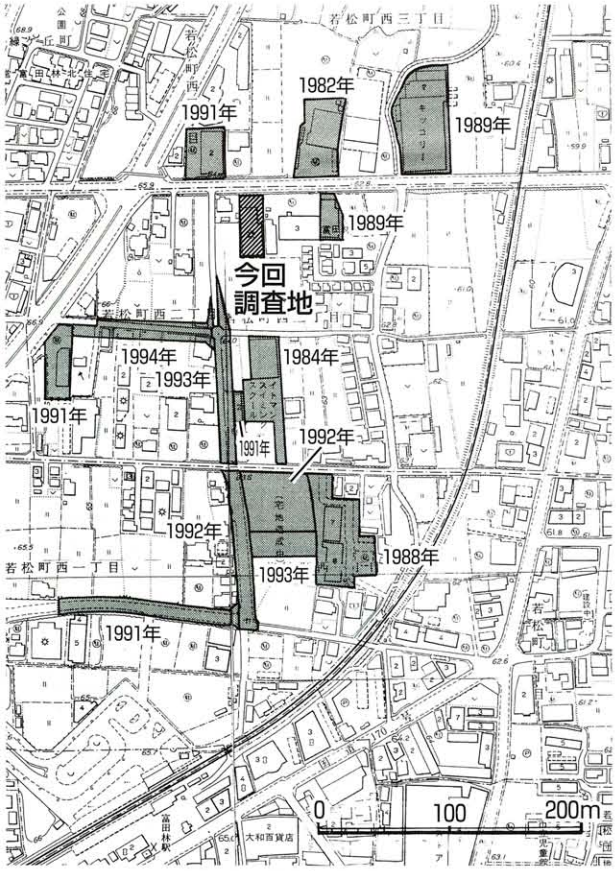


図１　調査地位置図

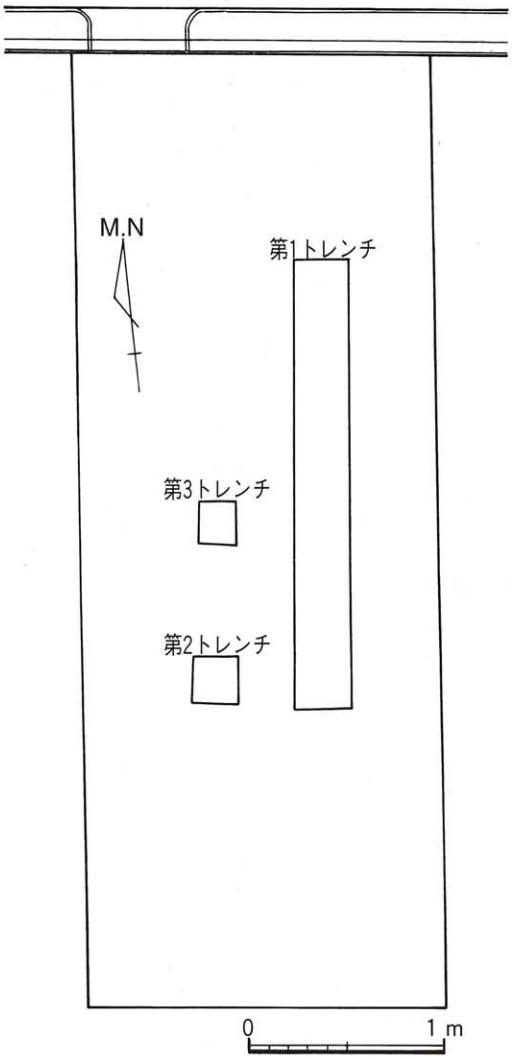


図２　調査区位置図

一方、遺跡の西半部は、弥生時代までの遺物は若干出土しているものの、古墳時代以降中世までの遺構が中心である。近鉄長野線富田林駅北方では、掘立柱建物跡が確認されており、確実に集落が存在したことがわかる。

今回の調査地は、遺跡の西端部に当たり、事業

主である大阪労働金庫の協力を得て、建物基礎部分を対象に調査を実施した。

調査の方法と基本層序（図２）

調査地中央のやや東よりに東西3m、南北23mの第１トレンチ、第１トレンチの南西側に2.5m四方の第２トレンチ、その北側に東西2m、南北2.2mの第３トレンチを設定して調査を行った。

基本層序は各トレンチとも同じで、盛土の下に３面の耕作面があり、その直下で地山となる。第３耕作土からは13世紀代の瓦器（図４-1、2）などに混じってサヌカイト製の石錐（図５-1）が出土している。

遺構は全て現況から約0.8m下の地山面で検出した。ただし、第２トレンチについては遺構は検出されていない。

遺構と遺物

検出された遺構は自然流路１、溝１、土坑２、ピット６である。

以下、各遺構について述べる。

自然流路（図３）

第１トレンチの北端部分で検出した。南肩は確認できたものの、北肩は調査区外である。幅約７m分を検出した。最も深い所で1.3mを測る。東は西より0.17m低い。断面観察では、流れが急な時期と緩やかな時期を繰り返しながら次第に幅が狭くなっていった様子がうかがえる。埋土からは弥生土器（図5-3）、土師器、須恵器、サヌカイト製の削器（図6-2）が出土している。

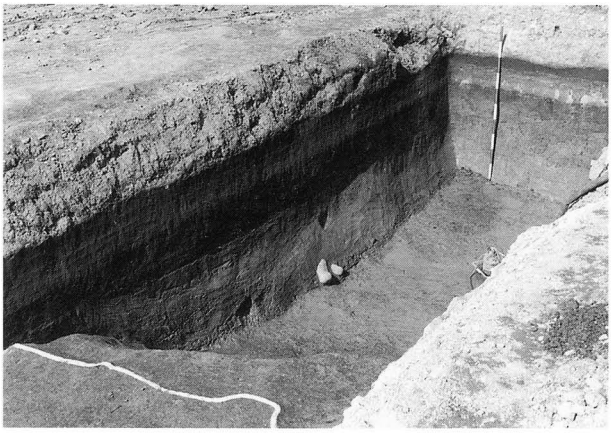


写真１　流路近景（南東から）

溝

第１トレンチの南端部分で検出した東西方向の溝である。幅1.0～1.5m、深さ0.6mを測る。西側にある第２トレンチではこの溝の続きになるものが検出されておらず、肩の形状から南に大きく曲がるようである。埋土は濁灰褐色砂質土で、黒色土器、土師器、須恵器、サヌカイト製の削器（図6-3）が出土している。

土坑１

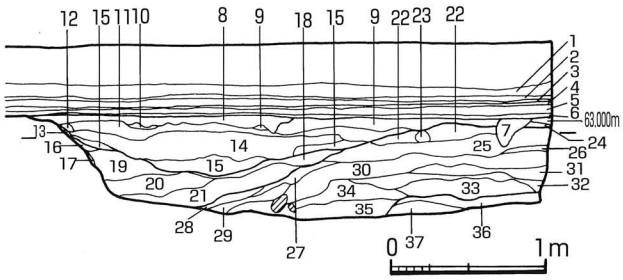
第１トレンチの南西隅で検出した不整形な土坑で、溝１に切られている。大半は調査区外にあり、南北1.21m、東西1.81m分を検出した。埋土は濁褐灰黄色弱粘質土（上層）、濁灰褐黄色弱粘質土（下層）の２層に分けることができ、両層から炭片と焼土塊が出土している。

土坑２

第３トレンチの北東部で検出した不整形の土坑である。大半は調査区外にあり、南北0.92m、東西0.85m分を検出した。埋土は濁灰褐色砂質土（上層）、灰青色シルト（下層）の２層に分けることができる。遺物は出土しなかった。

ピット

第１トレンチで６個検出しており、ピット１～３は自然流路の上面で、ピット４～６はトレンチ中央部で検出した。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。詳細については表を参照されたい。



1　耕土
2　床土
3　灰黄色土
4　濁黄灰色弱粘質土
5　濁灰黄色弱粘質土
6　濁黄灰色粘質土
7　暗褐灰色混砂粘質土
8　暗灰褐色混砂粘質土
9　濁黄灰褐色混砂弱粘質土
10　灰青黄色混砂粘質土
11　濁灰青黄色砂質土
12　灰青黄色混砂弱粘質土
13　黄褐色粘質土
14　濁黄灰青色砂質土
15　灰青黄色砂質土
16　灰青褐色弱粘質土
17　濁灰青褐色弱粘質土
18　灰青褐色シルト
19　濁灰青褐色粗砂に灰青黄色粘質土がブロック状に混じる
20　黄灰青色砂
21　濁灰青色砂
22　黄灰青色粘質土
23　暗褐灰色混砂粘質土に黄灰青色粘質土がブロック状に混じる
24　濁灰青黄色混砂弱粘質土
25　灰青黄色粘質土
26　黄灰青色弱粘質土
27　灰青色シルト
28　濁灰青黄色シルト
29　青灰色シルト（炭片含む）
30　灰褐黄色弱粘質土
31　灰青黄色弱粘質土
32　灰青黄色シルト
33　灰青色シルト
34　淡灰青色シルト
35　淡灰青黄色細砂
36　青灰色シルト
37　青灰色混礫細砂

図３　自然流路西側断面図

遺構名	形　状	規模(m)	深さ(m)	埋　　土
P－1	円形	0.23×0.21	0.07	灰黄褐色弱粘質土
P－2	円形	0.22×0.22	0.42	灰黄褐色弱粘質土
P－3	円形	0.20×0.20	0.05	灰黄褐色弱粘質土
P－4	円形	0.17×0.18	0.06	暗灰褐色混砂粘質土
P－5	円形	0.14×0.14	0.07	暗灰褐色混砂粘質土
P－6	円形	0.18×0.14	0.05	暗灰褐色混砂粘質土

ピットー覧表

まとめ

今回の調査は、トレンチ3箇所の狭い範囲であり、遺構もあまり検出されなかったが、調査地周辺の旧地形や集落の広がりを判断する上で貴重な資料を提供してくれたといえる。

第1トレンチ北端で検出した自然流路は、羽曳野丘陵から東に流れ込むもので、砂が厚く堆積していることからその水量は比較的多かったようである。出土遺物から推測すると、少なくとも弥生時代にはその流れが存在し、次第に規模を小さくしながら、水田化に伴い埋められたことが分かる。水田化の時期としては、上層の旧水田堆積に13世紀代の遺物が含まれていることから、この時期には確実に調査地周辺が水田化されたようである。

調査地の北西方には南河内において最も古い、飛鳥時代創建の新堂廃寺がある。寺域の南方には調査地に延びる谷があったことが推測され、古代寺院の立地条件を考える上で今回の流路は重要である。

調査地南方では、過去の調査で古墳時代後期から奈良時代の建物跡が確認されている。また調査地の北方でも溝やピットが確認されており、集落の存在が想定される。

今回の調査では、羽曳野丘陵から東方に流れる自然流路が検出されたことから、調査地周辺は谷筋に該当することが判明し、これらの立地条件の悪い場所を避けて、谷と谷に挟まれた平坦地に集落が営まれたことがわかる。このことは、調査地以南の石川西岸で顕著に見られる。

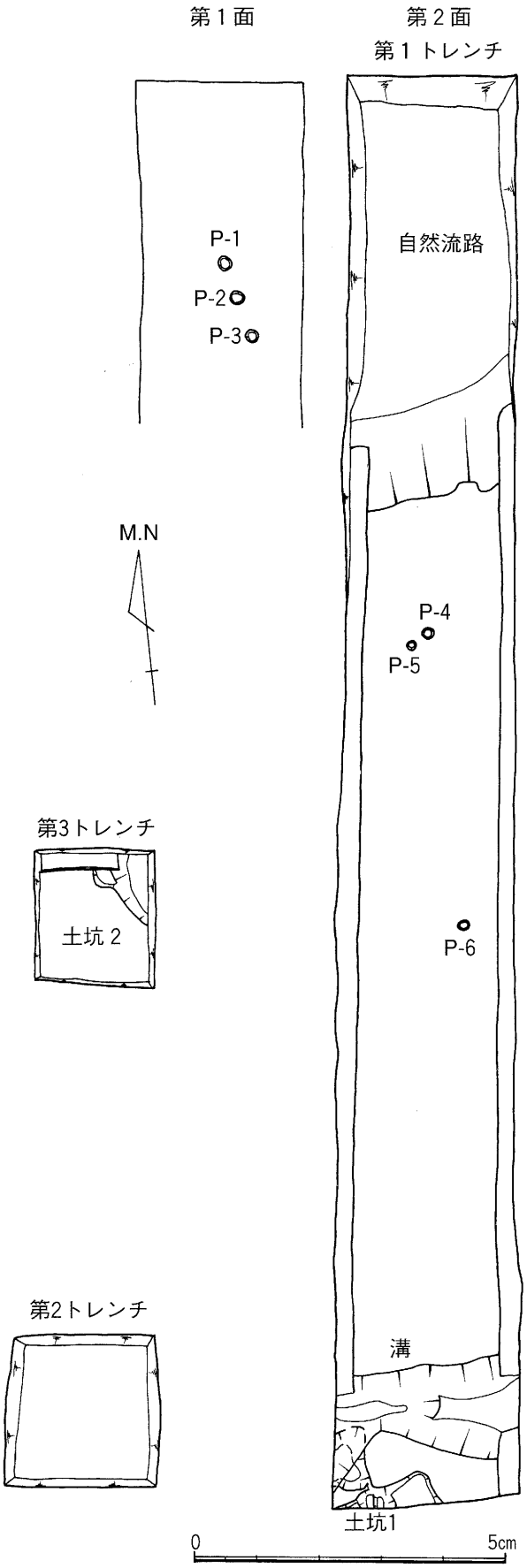
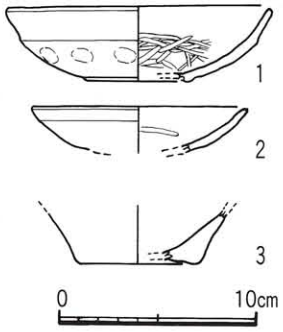
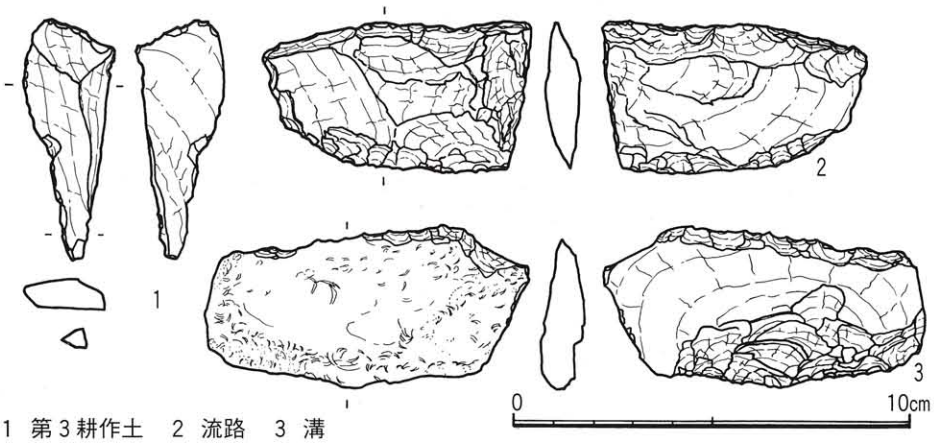


図4　遺構平面図



1、2　第3耕作土
3　　溝

図5　出土土器



1 第3耕作土　2 流路　3 溝

図6　出土石器

写真2　第1トレンチ全景（南から）

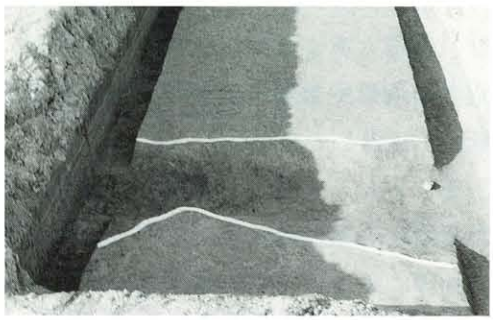


写真3　溝近景（南から）

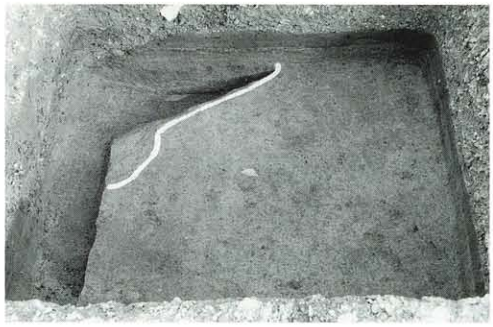


写真4　第3トレンチ全景（西から）

ふりがな	なかのいせき
書名	中野遺跡
副書名	富田林市遺跡調査会報告
巻次	3
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著書名	中辻　亘
編集機関	富田林市遺跡調査会
所在地	〒584　大阪府富田林市常盤町1番1号　☎0721－25－1000
発行年月日	西暦1997年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
中野遺跡（なかのいせき）	大阪府富田林市若松町西二丁目1696－1（おおさかふとんだばやしし わかまつちょうにし）	27214		34°30′19″	135°36′17″	1996.10.1 ～ 1997.1.31	80	銀行建設に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野遺跡	集落跡	弥生時代～中世	自然流路、溝、土坑、ピット	弥生土器、石器、土師器、須恵器、黒色土器、サヌカイト	